お伊勢さんの台所　　2009.12.14

「伊勢河崎」のまちなみ散歩

12 月 14 日三重県伊勢市の「河崎商人館」を訪れて、勢田川ぞいのまちなみを散策した。

小春日和の川べりを歩いて.....

近鉄名古屋駅 7.31″の急行鳥羽行きに乗り、伊勢市に向かった。通勤客で満員の列車は 30 分で桑名、1 時間で津に到着すると大勢の客は降りて、車内はがらんとなった。ここからは人の乗り降りも少なく、名古屋との結びつきも弱くなっているのが分かる。ここまでは殺風景な田んぼが広がっていたが、津を過ぎると畑作が盛んでキャベツ畑が多くキャベツの産地の看板も見られた。

9.07″伊勢市駅に到着する、線路沿いに進むと八間道路に突き当たり「河崎商人館」の道標が現われた。案内に従い道路を渡るのだが、かなりの交通量で近くに信号は見当たらない。車の流れが途切れたのを見計らって道路を横断すると、そこに「山田奉行所跡」の石柱が建っている。

山田奉行所跡の碑

カワセミもいる美しい勢田川

説明には土地整備のため30mほど移動してここに置かれたとある。その前を通り少し先で今度は左折してしばらく行くと勢田川にでる、両岸の堤防の下はそれぞれ石が敷き詰められている。ゆるやかにカーブした堤防は、春のような日差しを受けてポカポカ陽気の散歩道だ。
所々にベンチも置かれているし、緑の木にたくさん実をつけた夏みかんの黄色がとても美しいと思った。さらに物陰の水辺ではカワセミの姿も、そんな小道の散歩を楽しんで、中橋のところで左折して川に沿って続く河崎本通りに入る。まずは「河崎商人館」をめざす。

「河崎」は伊勢を支えた「台所」

河崎は16世紀頃から、伊勢神宮門前町の山田.宇治へ物資を運ぶために勢田川を利用した水上輸送と、物資を荷揚げして人馬で物資を送る陸上輸送を仲介する川の港としてにぎわった。江戸時代には「おかげ参り」の参宮客に物資を供給する問屋街として大きく成長した。さらに山田奉行より伊勢神宮周辺地域の米と魚の卸売り専売権を認められ、名実ともに「伊勢の台所」として全国に知られた商人町となりました。
河崎の街並の特長は、川に並行に走る通り沿いに切妻屋根が続き、町家や蔵が並びます。河岸の家は裏口から川へ、荷物の積み下ろしができるようになっていました。

河崎のまちづくり運動

現在のような街づくりが進められるきっかけとなったのは、昭和49年(1974)の七夕水害を機に勢田川の改修工事が始まりました。この改修工事が発端で河崎の街並を保存しようという動きが生まれます。昭和54年に「伊勢河崎の歴史と文化を育てる会」ができます。そして、資料館として河崎まちなみ館を建設し、さまざまな活動を行ってきました。平成11年には「NPO法人伊勢河崎まちづくり衆」を設立し、市民と行政の協同による河崎の歴史

と文化を生かしたまちづくりの一環として平成 14 年「伊勢河崎商人館」を開館。翌年には「河崎.川の駅」を開設し川を生かしたまちづくりにも取り組んでいます。

酒問屋を修復した「伊勢河崎商人館」

江戸時代から酒問屋を営んでいた小川酒店、江戸.明治時代に建築された蔵 7 棟、町屋 2 棟など、延べ面積約 1.000 ㎡の商家です。川に面して蔵があり、道路を隔てて商店.住宅に続き内蔵をもつ河崎の代表的な建物。平成 13 年に国の登録有形文化財に登録されました。今は建物の寄贈を受けた伊勢市が敷地を買収、平成 14 年(2002)伊勢河崎商人館として開館し、伊勢河崎まちづくり衆が運営管理を行っています。

河崎本通りを行くと道の川側に三つの蔵が並んでいる、それぞれカフェー、ギャラリーになっているが、これが伊勢河崎商人館の壱の蔵.弐の蔵.参の蔵だった。その向かいがあまり目立たない伊勢河崎商人館の正面入り口だった。

母屋の二階から見た弐の蔵、参の蔵

受付で入館料 300 円／人を支払うと、どちらからおいでですかとたずねられた。名古屋の郊外で半田の近くですと言うと、「そうですか、当地は半田や亀崎からの荷は多かったのです」と言いながら見学の手順を説明してくれた。そのカウンター横には瓶のサイダーが並んでいた、聞けばここ小川酒店はサイダーも製造していたという。つまり今はやりの復刻版なのだ「よかったらぜひ飲んでみて下さい」と売り込みがかかった。

母屋　ここの中心施設で和室. 茶室. 内蔵資料館からなっている。部屋自体はそんなに変ったものではないが、二階への階段は箱階段で今も物入れになっていた。二階の窓からは時代劇のセットのような、前の通りと壱の蔵. 弐の蔵. 参の蔵が眺められ、通りではここのスタッフと思われる二人の女性が道の真ん中で話し込んでいた。

河崎まちなみ館　伊勢と河崎の歴史と文化の展示がされている。さきほど聞いた半田や亀崎との物流についても、大きな伊勢湾を中心とした地図が掲示されて、どの地域からどんな物資が運ばれてきたのか一目で分かるようになっていた。やはり半田や亀崎からは醤油. 酒. 米. 干物などが多かった。

　ほかにはかつて河崎にあった、芝居小屋の名前をつけたイベントなどを行う蔵**「河崎角吾座(かどござ)」**がある。ここには大きなスクリーンもあり、映像で PR できるようになっていた。また昔は作っていたというサイダーのろ過施設、サイダー検査室も残されている。ただ全体の規模からして、大正末期の洋館の応接間である商人倶楽部は、こじんまりとしていたのが印象的だった。　一通り見学してまるで知らなかったので驚いたことがある、それは.....

河崎まちなみ館と河崎角吾座(かどござ)

内蔵資料館

日本最初の紙幣「山田羽書(やまだはがき)」

河崎商人を説明するために展示されていたのが、この「山田羽書と河崎商人の力」というもの。山田羽書というのが分からないので、何かと思い一通り読んでみると意外なことが分かった。

伊勢御師(いせおし)が発行した山田羽書は日本最初の紙幣として知られ、慶長15年(1610)のものが最古といわれる。伊勢御師というのはさしずめ今なら旅行業者で、参宮を勧めたり、旅行者の宿を手配した....とある。
山田羽書は幕府貨幣の丁銀との引き換えを約束した銀貨兌換券で、起源は参宮客向けの貨幣の預り手形といわれる。
山田羽書は近畿各地で発行された私札(藩札とは異なり個人が発行した紙幣)のモデルとなるもので信用も高く、宝永4年(1707)に幕府正貨の流通促進の為藩札発行が禁止されたが、山田羽書は例外とされ明治維新まで流通した。山田羽書は門前町山田の行政組織山田三方が発行していたが、寛政2年(1790)に山田三方の発行責任者が職務怠慢で処罰された。その後、発行組織が山田奉行の監督下に置かれ、新たに羽書取締役が設置され6名が就任。中でも河崎の町年寄りを務める野村太次兵衛は羽書取締役筆頭に任命された。また山田奉行が取締役所に預けた羽書御用金は、享和2年(1802)から筆頭取締役の野村邸で扱われていたが、文化9年(1812)に河崎南町西裏に御用金取扱所が建設された。このように寛政2年以降の山田奉行監督下における山田羽書の発行に関して河崎の商人は主導的に関与したが、羽書と幕府貨幣との交換に必要な手当金は上納せねばならず、金銭的負担を強いられていた。しかし、逆に河崎の商人の経済力は公権力に裏打ちされていたといえる。

喫茶店はあっても飲めないコーヒー

このあと散策地図を見ながら街並を歩いた。少し疲れたしお茶にしたいと思って歩いて行くと「川の駅」と名づけた洒落た休憩施設があった。入ってみると、ベランダがあってそこはもう河岸だった。古い昔ながらの家と川を

結びつけた街づくりがされている。船着場も整備されて落ち着いた家並みだけではなく、水が身近にある風景はとても安らぎを感じさせてくれる。

川の駅から見た眺め

しかし、喫茶店はないので先ほどの河崎商人館まで戻りカフェーに入った。ところがいくら探しても店員さんがいないのだ、やむを得ずマップを見て次の喫茶店まで歩く。うどん屋、かつおぶし屋、せともの屋、いい臭いのする洋菓子屋、古本屋、小売もしますと書いた卸のはきもの屋があって、街並の外れに古い石蔵を利用したカフェ「モナリザ」が現われた。でもなんてことか、月.火は休日となっている、メインの施設である河崎商人館が火曜日休みのため、それに合わせて連休としているようだ。それでもコーヒーが飲みたかったので、自販機で缶コーヒーを買い求め川べりのベンチに腰を下ろして、暖かな陽射しのもとで飲んだ。　コーヒーのあとは伊勢市駅まで戻り、JR で二見浦まで足を伸ばしてから帰った。